

共同研究の経緯

第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学

——常民文化資料共有化システムの開発——

研究代表者 泉水 英計

本共同研究は、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する民族学振興会資料を常民文化資料と位置づけ、これを研究者間で共有化するシステムの開発をはかるとともに、これを補完する資料群の発掘や、関係者からの聞き取りなどによって、民族誌に基礎を置く学術の歴史的展開の一端を明らかにすることを目的に企画された。

まず、民族学振興会資料の来歴について触れておく。今日の日本文化人類学会に直接連なる研究者たちを初めて全国的に組織化したのが、1934年末に結成された日本民族学会であった。第二次大戦中に文部省の民族研究所が設置されると、民族学会は解散しその外郭団体として改めて民族学協会を組織する。民族研究所が戦後すぐに廃庁となり、唯一の全国的な学者組織として残った。民族学協会は20年間にわたり学会の役割も担う。やがて、大学教育への参入や調査費助成の制度下など新たな研究環境が整備され、新世代の研究者も育成されてきたため、1963年には改めて日本民族学会が結成された。その結果、学会機能を分離した民族学協会が名称変更したのが、民族学振興会である。このような組織の変遷のなかで、学会創設時には理事を、民族学協会では会長兼理事長を務め、個人財産の寄付により学会附属研究所や博物館を設立するなど財政面でも無二の貢献を果たしたのが、アチック・ミュージアム（日本常民文化研究所）を主宰した澁澤敬三であった。1999年に財政難により民族学振興会が解散したとき、この間に神奈川大に移設されていた常民文化研究所にその蔵書と文書資料（若干の映像資料を含む）が寄贈されることになる。内訳は、和図書3,849点、洋図書2,666点、和雑誌972誌、洋雑誌586誌、および文書資料2,451点となっている。文書資料の中心は運営資料であり、最も古いものは1925年に作成されたもので、これを含め旧民族学会時代以前の文書は55点ある。民族学協会時代の文書は、1942年から1945年までが143点で、戦後から1965年までの文書は949点である。残る1,300点が民族学振興会時代に作成されたものだ。総量はおよそ3ファイルメーターとなる。

民族学振興会資料のうち書籍は速やかに登録作業がおこなわれ、日本常民文化研究所の蔵書として一般利用に供されたが、文書資料については、法律上慎重な取り扱いを要するものが含まれていたため、本共同研究の企画された時点に至っても公開のための準備が滞っていた。そこで、民族学、文化人類学、および民俗学の歴史について関心を抱く研究者を集め、公開に必要な作業を検討すると同時に、追跡調査にもとづいた学史研究を推進することになった。初年度の構成メンバは、清水昭俊、中生勝美、谷口陽子、泉水英計（以上、文化人類学）、坂野徹（科学史）、菊地暁（民俗学）である。

2009年8月に最初の会合を開き、民族学振興会文書資料を検分し、研究材料としての有用性が

高い部分を見極める作業をおこなった。その結果、豊富な内容がまとまっている文書で、且つ学史を跡づけるうえで重要なものとして、戦中に民族研究所と民族学協会が共同開催した「民族講座」の運営書類および筆記録や、学会の戦後復興を象徴する「東南アジア稲作民族文化総合調査」の記録などが浮上した。このうち「民族講座」に関連する資料については、利用にあたり必要な法的手続きの存在が指摘されていたので、同一資料を電子データで所有する文化人類学会と意見調整したうえで、神奈川大学日本常民文化研究所に要望を出し、同研究所の予算を使って11月から弁護士による法律相談を始めた。第2回研究会では、この経緯を踏まえ、「民族講座」の筆記録は、正式に著作権継承者の許諾を受けたいうえで翻刻し、解題を付して出版する計画を立てた。同様の手続きは、他の文書についても必要とされる可能性が高く、また、資料本体の保存も考慮して、民族学振興会文書資料の全体をマイクロリールに撮影し、プライバシー等の観点から開示が不適切なことが明らかな一部の文書を除いて見分作業用に簡易製本を作成することを決めた。

民族学振興会資料そのものについてのこれらの作業と平行して、共同研究に関連する個別テーマに沿って各共同研究者が主体的に調査地と調査内容を設定し、単独で或いは他の共同研究者と一緒に調査に赴いた。この範疇の当年度の主な活動は以下のとおりである。

- (1) 宮城（中生・泉水） 蒙古在住日本人資料の調査。
- (2) 石川（坂野・菊地・泉水） 九学会連合の能登調査に関する情報収集。
- (3) 沖縄（中生・坂野・菊地・谷口・泉水） 県立図書館および公文書館にて資料調査。伊平屋島と南部島尻地区にて過去の民俗調査について情報収集。
- (4) 京都（中生） 京都大学所蔵の旧民族研究所蔵書の調査。
- (5) 大阪・京都（泉水） 民族誌データベースの歴史という観点から HRAF の調査。
- (6) 熊本（谷口） J・エンブリの須恵村調査に関する情報収集。
- (7) 鹿児島（坂野） 九学会連合の奄美調査に関する情報収集。
- (8) 東京（菊地） 渋沢史料館にて澁澤敬三に宛てられた民族学者等の書簡の調査。

研究対象となる地域のすべてを既存メンバーではカバーできないことが初年度事業中に明らかとなったため、2010年度事業の開始にあたり、新たに木名瀬高嗣（文化人類学・アイヌ）と王京（民俗学・中国）をメンバーに加えた。

民族学振興会文書資料はマイクロ複写作業を継続し、「民族講座」の筆記録については、国立国会図書館にて著作権台帳や文化人名録などを探索して講師の遺族の調査をすすめた。あわせて、総数24名の講師について共同研究者間で仮分担を決め、それぞれの略歴と、全42本の講義の要約・紹介を作成した。

「東南アジア稲作民族文化総合調査」に関連して発生した文書群については、この資料を調査した経験をもつ東海大学・田口理恵氏を講師として研究会に招き、調査プロジェクトの歴史的文脈の解説と、民族学振興会資料には含まれていない成果物について教示を受けた。当年度のいま一つの研究会では谷口が「ミシガン大学日本研究所について」というタイトルで1950年代前半の同研究所岡山分室による村落調査の展開とその特徴について発表した。

以上に加え、個別テーマに沿った下記のような調査活動がおこなわれた。

- (1) 石川（坂野・菊地） 石川県立図書館小倉学文庫の調査および地方紙記事の収集。
- (2) 大阪（中生・谷口・泉水） 国立民族学博物館にて馬淵東一資料および HRAF ファイルの成

立に関する調査。

- (3) 北海道（清水・坂野・木名瀬） アイヌ民族総合調査（1950-51年）に関する資料収集および河野本道氏へのインタビュー。
- (4) 台湾（中生・菊地・泉水） 国立台湾大学に寄贈された国分直一の蔵書および書簡、フィールドノート、写真の調査。アチック・フィルムに収められた屏東パイワン村の追跡調査。
- (5) 東京（菊地） 成城大学民俗学研究所にて柳田国男旧蔵図書調査の調査。
- (6) パラオ（坂野・菊地・木名瀬・泉水） ベラウ国立博物館およびパラオ国立公文書館にて委任統治領時代の教育関連資料およびCIMA（ミクロネシア人類学共同調査）関連資料の調査。ベラウ・モデクゲイ高校にてインタビュー。
- (7) 熊本（菊地・谷口・泉水） 球磨郡あさぎり町須恵文化ホールにてJ・エンブリの須恵村調査に関する資料収集および関係者へのインタビュー。

2011年度最初の会合では、「民族講座」の翻刻に関連し、弁護士事務所が作成した文案を精査し、最終的な承諾書書式を決定した。続く第2回研究会では、元相模女子大教授・岡千曲氏を招いて共同インタビューの場を設け、20世紀中葉の日本の民族学を先導した父・岡正雄の学問形成と人となりについて尋ねた。第3回研究会は、調査来日中の王が「戦前期における日中民俗学の関わり」というタイトルで研究発表をした。次年度の国際シンポジウムが「二つのミンゾク学」というテーマで実施され、当研究班が担当することが決まったため、当年度最後の研究会は、フランスの社会科学高等研究院・日本研究所教授のパトリック・ヴェイバール氏を招き、「沖縄の民族学—民俗学と社会人類学のはざま」というタイトルで発表を依頼した。なお、これは一般聴衆の参加する公開講演形式の会合とした。

その他、共同研究者による主な調査活動には以下のようなものがあった。

- (1) 京都（菊地・泉水） 京都大学の民族研究所旧蔵書のうち特に未登録のまま放置されていた雑誌類の調査。
- (2) 山口（坂野・泉水） 周防大島町東和総合センターの宮本常一文庫の調査。下関市土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムにて金関丈夫関連情報の収集。
- (3) 神奈川（坂野・菊地・泉水） 相模原市の旧内郷村にて柳田国男らの民俗共同調査（1918年）の調査地巡見。
- (4) 沖縄（泉水） 那覇市歴史博物館にて、川平朝申に宛てられた金関丈夫、国分直一、馬淵東一らの書簡の調査。
- (5) 鹿児島（坂野） 県立図書館奄美分館、瀬戸内町立図書館・郷土館、宇宿貝塚跡などにて、九学会連合に関する調査および関係者へのインタビュー。
- (6) 沖縄（中生） 沖縄県公文書館にて、河村只雄の沖縄・台湾調査に関連する写真、日記および映像資料の調査。
- (7) 韓国（菊地・泉水） アチック・ミュージアムによる多島海調査の追跡調査。
- (8) 台湾（坂野・泉水） 南投市国史館台湾文献館にて、解放直後の台湾における日本人人類学者・民俗学者に関する資料の探索。

2012年度は、事業の開始にあたり実施された追加公募の結果、公開研究会の運営と民族講座の解題作成を念頭に三浦啓二（日バルカン関係、ルーマニア民俗学）と、重信幸彦（民俗学都市生活文化

研究)、そして金広植(歴史民俗学)が共同研究に加わった。

はじめの2回の研究会では公開研究会に向けて各共同研究者による個別研究の中間発表を順次おこない、第3回研究会では、報告書『国際常民文化研究叢書』(本書)への寄稿論文草稿の読み合わせをおこなった。

また、新加入メンバは次のように個別テーマに沿った調査活動をおこなっている。

- (1) 韓国(金)国立中央図書館と、ソウル大学図書館、および西江大学図書館にて、朝鮮民俗学会関連の雑誌・新聞記事の収集。釜山市広域市立市民図書館および国立国会図書館にて、植民地期の新聞記事の収集。
- (2) ルーマニア(三浦)ブカレスト大学中央図書館およびルーマニア・アカデミー宗教学研究所以て、エリアードに関連した一次資料の調査。

例年通り12月に国際常民文化研究機構の第4回国際シンポジウム「二つのミンゾク学—多文化共生のための人類文化研究—」が開催され、その第II部として公開研究会「ミンゾク研究の光と影—近代日本の異文化体験と学知—」を以下のような構成で実施した。

- (1-1) 「『大東亜共栄圏』の民族学—民族の戦争利用—」(中生)
- (1-2) 「民族学の学術動員—平野義太郎の戦時プロジェクト—」(清水)
- (1-3) 「泉靖一のニューギニア調査と軍属人類学—大東亜戦争と学問—」(ゲスト・全京秀)
- (2-1) 「民研本転々録—民族研究所蔵書の戦中と戦後—」(菊地)
- (2-2) 「『アイヌ民族総合調査』と戦後のミンゾク学/アイヌ研究」(木名瀬)
- (3-1) 「米国人による戦後日本調査とその展開—ミシガン大学日本研究所の1950年から1955年の瀬戸内海地域研究—」(谷口)
- (3-2) 「中国は柳田国男にとってどんな意味があったのか」(王)

坂野、重信、金がこの順番でセッションごとのコメントをし、三浦が全体の講評、泉水が発題進行を担当した。

この間、民族講座の翻刻出版に関する作業は、著作権上の手続きが必要な24件中の7件について遺族等から承諾書を受領し、交渉中が2件となっている。残る15件については著作権継承者が不明であったことから、文化庁長官の裁定を受けるための事前相談まで作業が進捗している。2013年度には裁定を申請し、同時に解題の作成作業を開始する予定である。

共同研究者・研究協力者一覧

共同研究職分	氏名	所属機関	専 門	所属期間
5. 常民文化資料共有化システムの開発				
5-1 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学				
代表者	泉水 英計	神奈川大学	社会人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	菊 地 暁	京都大学	民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	木名瀬高嗣	東京理科大学	文化人類学	2010. 6. 21 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	金 広 植	東京学芸大学	歴史民俗学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	坂 野 徹	日本大学	科学史	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	重信 幸彦	国立歴史民俗博物館	民俗学、都市生活文化研究	2012. 5. 1 ~ 2013. 3. 31
共同研究者	清水 昭俊	神奈川大学	文化人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	谷口 陽子	専修大学	文化人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	中生 勝美	桜美林大学	社会人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31
共同研究者	三浦 啓二	元外務省	日バルカン関係、ルーマニア 民俗学	2012. 5. 1 ~ 2013. 3. 31
研究協力者	王 京	北京大学	民俗学	2010. 6. 21 ~ 2014. 3. 31
研究協力者	高倉 浩樹	東北大学	文化人類学	2010. 6. 21 ~ 2011. 7. 6
研究協力者	田口 理恵	東海大学	文化人類学	2009. 8. 4 ~ 2014. 3. 31

共同研究職分	氏名	所属機関	年月日
研究会発表者	全 京 秀	ソウル大学校	2012. 12. 9
通訳者	李 徳 雨	神奈川大学大学院 歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程	2012. 12. 9

共同研究職分	氏名	年月日
業務協力者	小磯 詩織	2011. 12. 1 ~ 2012. 3. 31
業務協力者	内藤 久義	2009. 10. 22 ~ 2011. 3. 31
業務協力者	舟山 宜宏	2010. 12. 1 ~ 2012. 12. 27